

令和3年度

学校・家庭・地域連携支援事業報告書



茨城県教育委員会

事業報告書

《学校・家庭・地域連携支援事業モデル校》

教育事務所	市町村	学校名	学校長氏名
水戸	城里町	桂小学校	菌部 守
県北	高萩市	東小学校	國井 春美
鹿行	鹿嶋市	大同西小学校	樋口 洋美

《実践研究テーマ》

学校名	テーマ
城里町立桂小学校	学校・家庭・地域との効果的な連携体制の構築 ～地域との交流・連携の機会をとおして～
高萩市立東小学校	地域の教育資源を生かし、 地域とのつながりを大切にした学校づくり —地域自主防災会と連携した安全マップづくりを通して—
鹿嶋市立大同西小学校	学校・家庭・地域でつくる 「だれもが いきいき にこにこ笑顔の しょう学校」 ～コミュニティ・スクール大西スタイルの構築を目指して～

(様式2)

令和3年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名 (城里町立桂小学校)

1 学校全体としての取組

- ① あいさつ運動・・・町の「更生保護女性会」と6年生児童により、月1回の実施。
教務主任と6年生担任が窓口になり、連絡調整を行った。
- ② 読み聞かせ・・・町内の「あすなろの会」が月に1回来校し、高学年と低学年に分けて実施。連絡調整は、教務主任が行った。
- ③ 昔遊び体験・・・1年生の生活科の学習に、区長やその友人が講師として参加。
「青少年育成桂小学区会議」の組織を活用しながら、教頭が連絡調整を行った。
- ④ 防災体験活動・・・町「防災担当者」が来校し、防災クイズや紙食器作り体験を実施
本校の安全主任・教務主任が連絡調整を行った。
- ⑤ わーほい集会・・・学区内「錫高野地区高齢者」が中心となり、1/14に実施。
「青少年育成桂小学区会議」の組織を活用しながら、教頭が連絡調整を行った。

2 家庭・地域等との連携の工夫点



新型コロナウイルス感染が拡大する中で、高齢者を中心とした地域連携は難しい場面が数多くあった。今年度は、感染予防を最優先し、地域の方が来校の際に不安を感じないような活動内容や場の工夫を行った。

「読み聞かせ」では、できるだけ広い空間で行った。手元の絵本が見えなくなってしまうので、プロジェクターを活用してスクリーンに映し、子供たちが楽しめるようにした。

1年生の「昔遊び」でも体育館を使い、活動中の接触をできるだけ最小限にした。子供たちにとって初めての遊びが多かったので、講師の人数を多くできるように区長にお願いし、友人なども誘っていただいた。普段、子供たちとふれ合う機会が少ない方にとってはとても楽しい活動になり、お互いに生き生きとした表情が見られた。





「わーほい集会」では、櫓を担当して下さった「錫高野地区高齢者」の方々を集会に講師として招き、伝統行事「わーほい」についての説明をお願いした。今年は、新型コロナウイルスの感染拡大が心配されたので、炭火で餅をあぶり「無病息災」を願いながら食べる活動は中止にした。児童が食べる餅は、町の「食生活改善推進員」を中心に準備していただく予定であった。

集会の最後には、お手伝いいただいた方々に感謝の気持ちを表す場面を設定し、子供たちに、地域との連携で成り立っている行事であることや、地域の方に感謝する心を大切にすることを伝えている。このような子供たちの姿もあり、「わーほい集会」の実施を楽しみにしている地域住民も多い。

3 事業の成果と課題

【成果】

- ・地域の力を学校内に入れることで、子供たちの活動意欲が向上し、目の輝きが増している。2学期末に実施した児童対象のアンケート「学校が楽しい」の質問では、「そう思う」「どちらかというと思う」と答えた児童が、合わせて100%になるなど学校生活を楽しんでいることが分かった。地域との連携事業を通して、子供たちは、自分が住んでいる地域の方の活動内容を理解し、地域を愛する気持ちや地域の人々に感謝する気持ちをもつことができたようである。地域の方にとっては、孫のような子供たちとの直接的なふれあいを通して、生きる活力や活動への創意工夫の熱意が高まるなど、多くの成果が見られた。

【課題】

①事業を担当する地域住民の高齢化

それぞれの組織・団体との連携を図りながら、縮小や消滅なく活動できる人数確保をお願いしている。そのために、学校側で協力できることについて、今後も協議を継続していく必要がある。

②協力していただく方々の補償

学校に向かうための交通費、途中での事故や校内での活動中の事故・怪我などの補償を明確にしていかなければならない。町教育委員会との協議を通して、方向性を決定しておく必要がある。

③事業実施のための時間確保

働き方改革等によって、事業を行うために必要な時間の確保が難しくなっている。担当者や担任の負担が増大しないように、管理職や教務主任等も積極的に計画・運営に携わり、事業への負担感が増大しないような配慮が必要である。

(様式2)

令和3年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名 (高萩市立東小学校)

1 学校全体としての取組

学校の組織目標である「地域と共に創る学校」を目指し、地域人材を活用した体験活動や交流活動を充実させることにより、教育活動の活性化を図り、心豊かな児童を育成することに取り組んだ。

1 「はぎッズサポーター」の活用

(1) 様々な場面での学習支援

※「はぎッズサポーター」は、高萩市教育委員会が募集している市民ボランティア。地域の方々の経験や技能を教育活動に生かし、授業や学校行事等で支援してくださる方を募っている。

日常的な授業の中に「はぎッズサポーター」を計画的に配置して支援を受けた。



3年～6年生での書写指導



5・6年生での家庭科裁縫指導

(2) 「はぎッズサポーター」を講師とした交流行事

今年度、本校で支援をいただいた「はぎッズサポーター」は、地域で朗読の会を主宰されている方や書道教室の先生、県の障害者スポーツ協議会の会員、日本陸上競技連盟のS級審判員などで、地域の人材を活用し、専門的な知識や技能の指導を受けることができた。



低学年「読み聞かせ会」



中学年「レクリエーション」



高学年「陸上競技練習」

2 「地域自主防災会」と連携した体験活動

(1) 「地域自主防災会」の協力による幼・小連携した避難訓練

津波を想定した、避難所（高台）までの避難訓練で、避難経路の交通安全指導を「地域自主防災会」の方々をお願いした。また、打合せ段階から、避難経路の確認や直前の下見を「地域自主防災会」の方々に行った。



「地域自主防災会」の協力による幼・小連携した避難訓練

(2) 「高萩東コミュニティ・スクール委員」と協働しての安全マップづくり

「高萩東コミュニティ・スクール委員」の方々を講師として、6年生児童による安全マップづくりを行った。児童がタブレット端末を持ち、地域に出て行って、危険箇所や地域の特徴を取材し、写真撮影して、地図にまとめた。



「高萩東コミュニティ・スクール委員」と協働しての安全マップづくり

2 家庭・地域等との連携の工夫点

1 「地域自主防災会」と日常的に築く良好な関係性

- ・日常的に登下校の見守りをしている。
- ・月初めの3日間、あいさつ運動（自主防災会のほか、教師・児童・PTA担当者が参加）を行っている。



2 地域の窓口となる、中心的な人物との連携

- ・地域自主防災会のメンバーで、高萩東コミュニティ・スクール委員であり、さらにスポーツ・レクリエーション指導員の資格をもつ方が、学校と各委員との間の窓口となって行事等を進めてくださった。

3 事業の成果と課題

【成果】

- ・地域の方々との交流や体験活動等を行ったことで、児童たちが自分の住む地域について見つめ直すことができ、地域のよさを感じることができた。
- ・専門的な知識や技能をもつ方から指導を受けることで、充実した学習ができ、確かな知識や技能を身に付けることができた。
- ・地域人材を活用した体験活動や交流活動を充実させたことにより、家庭だけでなく地域からの学校への関心が高まり、「地域と共に創る学校」の具現化に近づけることができた。

※学校評価アンケートより（※A評価は「よくあてはまる」「あてはまる」の合計）

- ・教師の自己評価「地域人材の活用」A評価 93.3%（1学期80.0%）
- ・児童のアンケート「外部講師の授業が楽しい」A評価 96.4%（1学期86.8%）

【課題】

○継続した人材の確保

- ・学校として、今後連携していきたい分野としては、理科の実験支援や音楽の実技指導など専

門的な知識や技能をもつ分野が望まれる。適した人材の発掘、連携に努めていきたい。

○学校運営協議会「高萩東コミュニティ・スクール」との連携

・本校の学区では発足して間もない学校運営協議会ではあるが、今後は学校運営協議会の組織力を生かし、継続的な活動として続けるようにしたい。

○窓口となるコーディネーターの役割の見直しや打合せ時間の確保

・新しい事業を始めるまではコーディネーターが中心となって段取りをつけることになるが、その後は一部の職員に偏ることなく進めていく必要がある。

(様式2)

令和3年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名 (鹿嶋市立大同西小学校)

1 学校全体としての取組

テーマ 学校・家庭・地域でつくる「だれもが いきいき にこにこ笑顔の しょう学校」
～コミュニティ・スクール大西スタイルの構築を目指して～

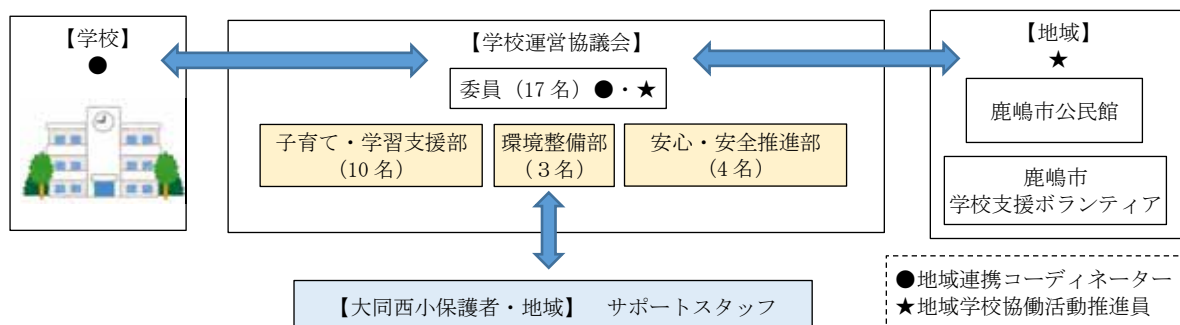
(1) 学校運営協議会の推進

① 委員選出

委員には、地区長、民生委員児童委員、青少年相談員、公民館、駐在所、PTA本部、学校のそれぞれの代表者と有識者を合わせた17名を選出。有識者として現在の役職にこだわらず、卒業生の保護者等に加入してもらった。本気で地域の子供たちのことを考えてくれる尊い人財である。

② 組織づくり

協議を重ねていく中で、委員が主体的に活動を進められるような組織づくりの必要性を感じ次のように3つの部会をつくった。また、学校独自でサポートスタッフの募集を行い、連携・協働の強化を図った。学校の窓口は「地域連携コーディネーター」(教頭)、地域の窓口は「地域学校協働活動推進員」となり、各活動のコーディネートを行った。



③ 協議内容

ア. 学校運営の基本方針の承認

イ. 育てたい児童像の共有

ウ. 授業参観

エ. ア、イ、ウを受けて、子供のために学校、地域ができること・やってみたいことを熟議

オ. 学校評価の検証

エにおいて重要なことは、我々委員がわくわく楽しんでやるということ。ここでは以下のようなアイデア(夢)がでた。

○あいさつ運動の輪を拡充→月1回、集会委員会児童とともに実施

○市民一斉清掃への参加を呼びかけ、子供・保護者・地域住民で協働→年3回実施

○世代をこえて一緒にできるスポーツ「ボッチャ」教室

○自然体験教室・物づくり教室

○地域とともに防犯教室・防災教室

こうした意見を出す委員の願いは、「子供たちに地域のお知り合いを増やして安心してもらいたい。」そして「いきいきと頑張る大人の姿を見せたい。」という温かい気持ちである。コ



コロナ禍ではあるが、実践可能なことからスタートしていった。

(2) 学校支援ボランティア活用による学習・活動の充実

鹿嶋市学校支援ボランティア制度を活用し、地域で活躍する人々と学習・活動を実施。

- ① 読み聞かせ（全学年）…読み聞かせグループによる読み聞かせ
- ② 福祉体験学習（4年生）…各ボランティア団体による車椅子体験、点字教室、手話教室
- ③ 理科特別授業（5年生）…元気象庁職員による「天気」の学習
- ④ 習字指導の補助（3年生）…書道教室指導者による指導補助



(3) その他地域事業所との連携による学習・活動

- ① さつまいも苗植え、収穫（全学年）：JAなめがたしおさいとの連携活動
- ② リサイクル、環境学習（6年生）：ユニクロアクロスプラザ神栖店との連携授業



2 家庭・地域等との連携の工夫点

(1) 活動しやすい体制づくり

学校運営協議会委員の主体的活動を促進するため、3つの部会をつくり、各部会において企画・実践できるようにした。

(2) 学校独自のサポートスタッフの募集

学校運営協議会での提案により、学校独自でサポートスタッフを募集した。「やれる人が、やれる時に、やれることを」をスローガンに、より多くの人に関われる体制づくりをした。またスタッフの活動拠点となるように「スタッフルーム」を設置し、常時スタッフが活用できるようにした。

(3) 家庭・地域への広報活動

学校運営協議会の議事報告、地域との連携事業について、学校だより、学校HPで必ず広報した。市内一斉清掃やサポートスタッフの募集等は、案内文書やチラシを作成し、各行政区の協力を得て、学区内の全戸配付・回覧を行った。多くの保護者、地域住民が認知してくれるようになった。

3 事業の成果と課題

【成果】

市教育委員会社会教育主事からの助言をいただきながら、本年度、学校運営協議会の体制づくりを着実に進めることができ、「大西スタイル」が構築されつつある。委員自身が「いきいきにこにこ笑顔」でいたいと主体的に参加し、「地域の子供たちを、地域のみんなで見守り、育てたい」という意識が高まっていることも大きな成果である。

- ・児童アンケート「学校は楽しく、安心できる場所である」96.8%（前年度より3.6ポイント増）
- ・保護者、教職員アンケート「学校は、家庭や地域と積極的に連携・協力している」92.9%（2.4ポイント増）

【課題】

学校運営協議会の組織と、学校の「校務分掌」をリンクさせ、各連携事業を効率的に、かつ

効果的に実施できるよう、連携を図っていきたい。